

校長研修だより200

Welcome to the possible room !

2025・5・28 重枝 一郎

私は、2007年11月から2020年1月まで「風土会」という研修会を行っていた。この「風土会」とは、「望ましい人間関係を育てる効果的な集団づくりの学習会」として発足した。私は当時、「学級の雰囲気+学級の文化=学級の風土」という話をしていたこともあり、「風土会」という会名になった。

「学級の雰囲気」は、その時その時の学級の状態のことで、明るいとか暗いとかの教室の状態を基本とする。これは、担任をはじめとする、そこにいる人の誰かの力が影響する。

「学級の文化」は、意図的かつ刷新しながら継続していく活動の成果として生じるものである。学級目標やルーティンにしている活動、こだわっているやり方はここに影響していく。

この2つをたし算すると「学級風土」になる。

「風土会」の立ち上げの際、HPに次のようなあいさつ文を書いた。

(HPはまだ存在する。「風土会」で検索)

Welcome to the possible room !

「風土会」でこだわっているのは、生徒の変容であり、学級・学年集団、学校の変容です。「学級風土」「学年風土」「学校風土」をつくっていくための「ビジョン・理論・実践」を学習します。生徒、学校を変容させるためには、まず、教師自身が成長する必要があります。そこで、さまざまな理論を学ぶとともに、参加体験型の学習も取り入れていきます。よって、本会は教師のためのファシリテーション講座にもなると考えています。

ファシリテーションとは、生徒が参加型のエクササイズを通して、体験を積み、振り返り、気づき、学び合うプロセスをサポートすることです。学年歴が上がって高校くらいになると、講義形式の授業が多くなり、生徒の姿勢は受け身になっていきます。そこで、能動的な学びを促進するために、自身のコーチング技術を高める必要があります。私が担任役で、参加者が生徒役で、生徒の気持ちや行動の変容の気づきを獲得してもらいたいと思います。

大まかな流れとして、まず、明確なビジョン&理論の話をします。次に、How to 実践です。私の実際の授業ビデオを見ながらポイントを説明します。私の生の声、ふるまいを見てもらい、「自分なら」という効果的な活用を考えてもらいます。最後は、短時間になるかもしれませんが、それをみなで体験し、これからの実践のイメージをもてるようにしていきます。

このような感じで、12年間で80回くらい、「風土会」をした。記録を見ると2500人以上の人が参加していた。

私は、自分がうまくいった、ハズレがない実践を紹介していたつもりだった。しかし、ある時、同じ内容・方法で他の人が試みた際、再現性は決して高くなかったことを耳にした。理由ははっきりしていた。私は、授業のコンテンツを教えていて、担任としてのスキルを教える部分が弱かった。担任としてのスキルは、指導、援助、支援のプロセスが大事であり、教科、学年、校種を超えて存在し、突然でもあり、経験でもあり、教室内のことでもあり、教室外のことでもあり、伝えるのが難しい。私は、「担任がリードするけど、生徒主体にするという矛盾した働きをする」とだけは、いつも言っていた。

年度初めの気持ちを振り返るタイミングの「6月」。維持ルールを向上ルールにする取り組みで生徒と再契約してほしい。「6月を制するクラスは、1年間を楽しめる」。